

第1章

明石市の概要

1. 自然的・地理的環境

本市は、古代より「明石(あかし)」と呼ばれ、日本標準時子午線上にあって、播磨灘に面した広大な段丘面に位置する。また、年間を通じて気候は温暖である。

2. 社会的状況

人口は過去10年間、29万人超で推移しており、子育て層を中心とした新たな住民が流入している。産業面でみると漁業や農業、酒造などの地場産業、魚の棚商店街などの商業、創業100年を超える工業生産企業など、多様な産業構造を有している。そのなかで、自然、歴史、市街地、生活景観が一体となった景観が、市内各地域それぞれの特徴を示している。

3. 歴史的背景

- (1) 先史：大久保町西脇や藤江出ノ上から出土したナイフ形石器などから、旧石器時代には明石に人が住み始めたといわれる。
- (2) 古代：古代山陽道が確認されており、9世紀には淡路島の石屋(現、岩屋)と明石との間にはじめて船と渡し守がおかれるなど、古くから人々や物が行きかっていた。
- (3) 中世：中国から入ってきたと思われる碗や壺類が発見され、物流・交流も頻繁に行われるようになった。また、須恵器や土師器の生産も盛んに行われるようになったことから、ものづくりの町・明石の由来を知ることができる。また、明石海峡の潮待ちの港としての魚住泊の修築作業が繰り返し行われ、海峡の町・明石の基盤をつくりだした。
- (4) 近世：安土桃山時代に領主高山右近が船上城を造営、江戸時代には小笠原忠政が現在の地に明石城・明石城下を築いた。また、街道の発達、新田開発、酒造業などの産業振興もあいまって、明治維新まで、城下町、街道筋、新田開発が進められた地区などを中心に町が発展してきた。
- (5) 近代：明治維新後、明石城は、明治6(1873)年に廃城となったが、大正7(1918)年には兵庫県立公園として人々の憩いの場となった。明治時代には、学校や金融機関の創設、山陽鉄道の開通などが進み、明治44(1911)年には夏目漱石が柿落として講演した中崎公会堂が建設された。大正8(1919)年には明石市制が施行され、現代の町の繁栄へとつながっていく。
- (6) 現代：戦後の復興期を経て、昭和26(1951)年に新明石市が誕生した。昭和35(1960)年には、子午線の街、明石を象徴する市立天文科学館が竣工した。しかし、平成7(1995)年の兵庫県南部地震で史跡明石城跡を始めとして多くの歴史文化遺産が被害を受けた。しかし、震災後は防災にも力を入れ、令和元(2019)年に市制施行100周年を迎えた。

第1章 明石市の概要

1. 自然的・地理的環境

(1) 位置・面積

本市は東経 135 度の日本標準時子午線が通り、兵庫県中南部の阪神都市圏と播磨都市圏に接し、海を隔てて淡路島を望む位置にある。市の東と北は神戸市と、西は加古川市や播磨町、稲美町と接しており、明治 12 (1879) 年に行政区画として発足した当時の明石郡は、神戸市垂水区、西区の全域、須磨区の一部を含む区域であった。現在の市域面積は 49.42 km²であり、南北は最長 9.4km、東西は最長 15.6km、最高地の標高は 94.6m であり、東西に細長く平坦な市街地を形成している。市域は歴史的なつながり、小学校区など生活圏のまとまりや土地利用などにより、東から明石東部、西明石、大久保、魚住、二見の 5 地域に区分される。

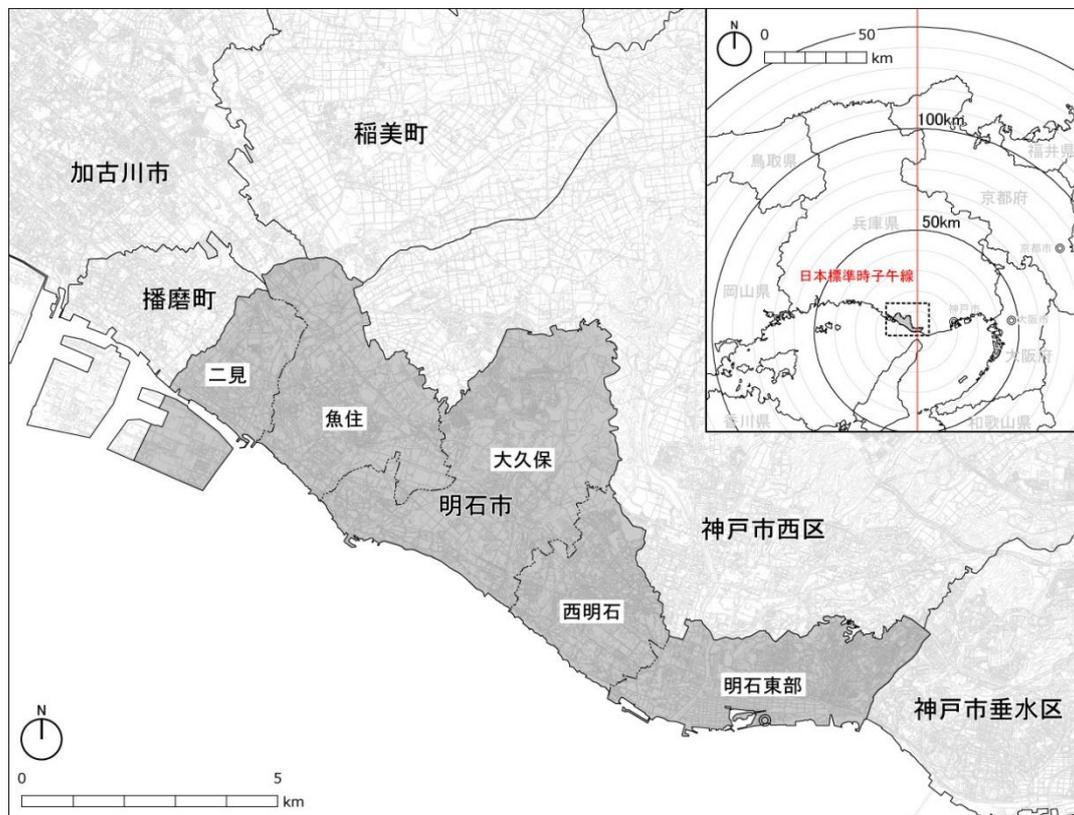


図 1-1 明石市の位置

(2) 地名

「明石」の地名は、『延喜式』には三か所記載されているが、いずれも「明石郡」と表記されている。『延喜式』に遅れて成立する『倭名類聚抄』にも「明石郡」と表記され、また、室町時代中期の写本とされる『大東急本』(大東急記念文庫所蔵)には「安加之」の読みがつけられている。加えて、『続日本紀』には明石郡についての記述が 3 か所ある。これらのことから、奈良時代、平安時代の初めには公的な文書には「明石」の表記が用いられ、「アカシ」と読まれてきたと考えられる。一方、『日本書紀』の「アカシ」表記は 5 例あるが、いずれも「赤石」と表記している。このことから「赤石」の表記も「明石」のように公的な表記ではないものの、7 世紀後半から 8 世紀にかけて用いられた表記であると考えられる。

(3) 地形

本市の地形は、六甲山系山麓域に広く発達する広大な段丘面が播磨灘に接する位置にあたり、山地がないことが特徴である。市域の標高の最高値は大久保町松陰で 94.6m、最低値は林3丁目で 0.9m である。

地形は、大きく丘陵地、台地段丘、低地で構成される。

台地段丘についてみると、市域東側は神戸市西区からつながる上位砂礫台地、中位砂礫台地で構成され、市域西側は印南野台地につながる中位砂礫台地を構成している。これらの段丘はそれぞれ魚住段丘、西八木段丘と表記される。

段丘堆積物は海成の要素が強く、第四紀後期の海水準変動の影響を強く反映した堆積状況を示している。

また、河川は瀬戸川、清水川、赤根川、谷八木川、明石川、朝霧川が流下しており、瀬戸川、赤根川、明石川及び朝霧川沿いに低地が発達し、厚い沖積層で構成されている。これらの沖積地の河口部では、東西方向に砂嘴が形成される。この砂嘴の背後に低湿地が広がり、古くからこうした地形を利用し、明石や魚住などの天然の良港が築かれた。

明石川流域の市域南部の低地は、市街化が進み、明石市の主要官公庁が立ち並ぶ。

本市では、この低地と台地の南端部に遺跡が認められる。

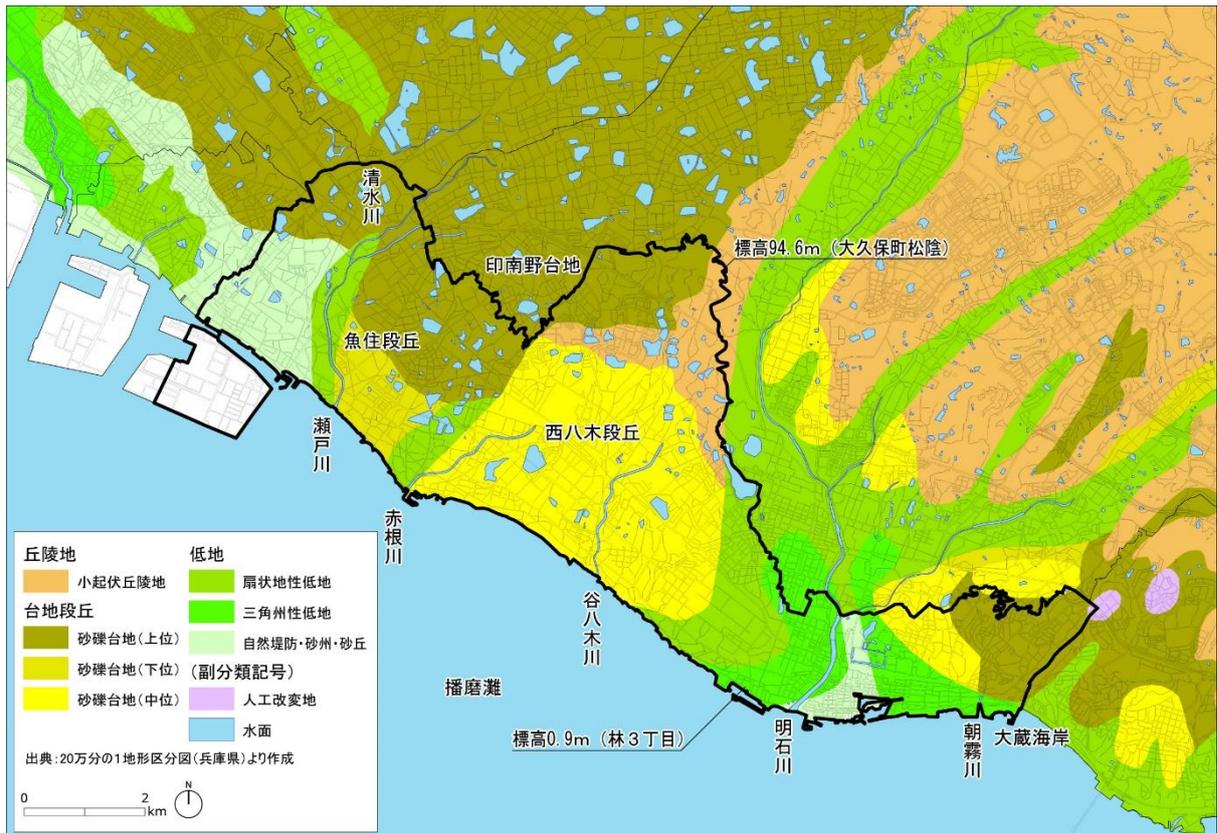


図1-2 明石市周辺の地形区分

海底の地形についてみると、本市の沿岸は林崎漁港以西に遠浅が続いており、豊かな漁場が存在する。

瀬戸内海の潮汐は、外海に生じた潮汐が潮汐波となって、主に紀伊水道と豊後水道から瀬戸内海に入り、内陸側に波及している。

明石海峡の潮流は、大潮の午前中は上げ潮となって大阪湾から播磨灘へ向かい、小潮の午前中は下げ潮となって播磨灘から大阪湾方向へ向かう。

干満の差により発生する激しい潮流によって、林崎漁港の沖合に水深 100m以上の断崖が形成されている。

一方、本市沿岸の海域には、砂地の浅瀬が広がっており、水深は5～30mで周囲の海（40m以深）から砂地が盛り上がっている浅瀬があり、「鹿ノ瀬」と呼ばれる。

「鹿ノ瀬」は、播磨灘北東部に位置し、明石海峡の西側から南西方向に伸び、東西約 20 km、南北約 5 kmの範囲で、潮位によってはさらに深浅が大きくなり、中大型船舶にとっては危険水域となる。

海底は砂質～砂礫質で、イカナゴやタイ、チヌ、スズキ、マダコなどの産卵や夏眠場になっており、瀬戸内海随一の「魚の宝庫」といわれる。

「鹿ノ瀬」は、林崎の雌鹿が浅瀬伝いに小豆島^{しよどしま}まで渡ったと伝えられることが、名前の由来となったとされる。

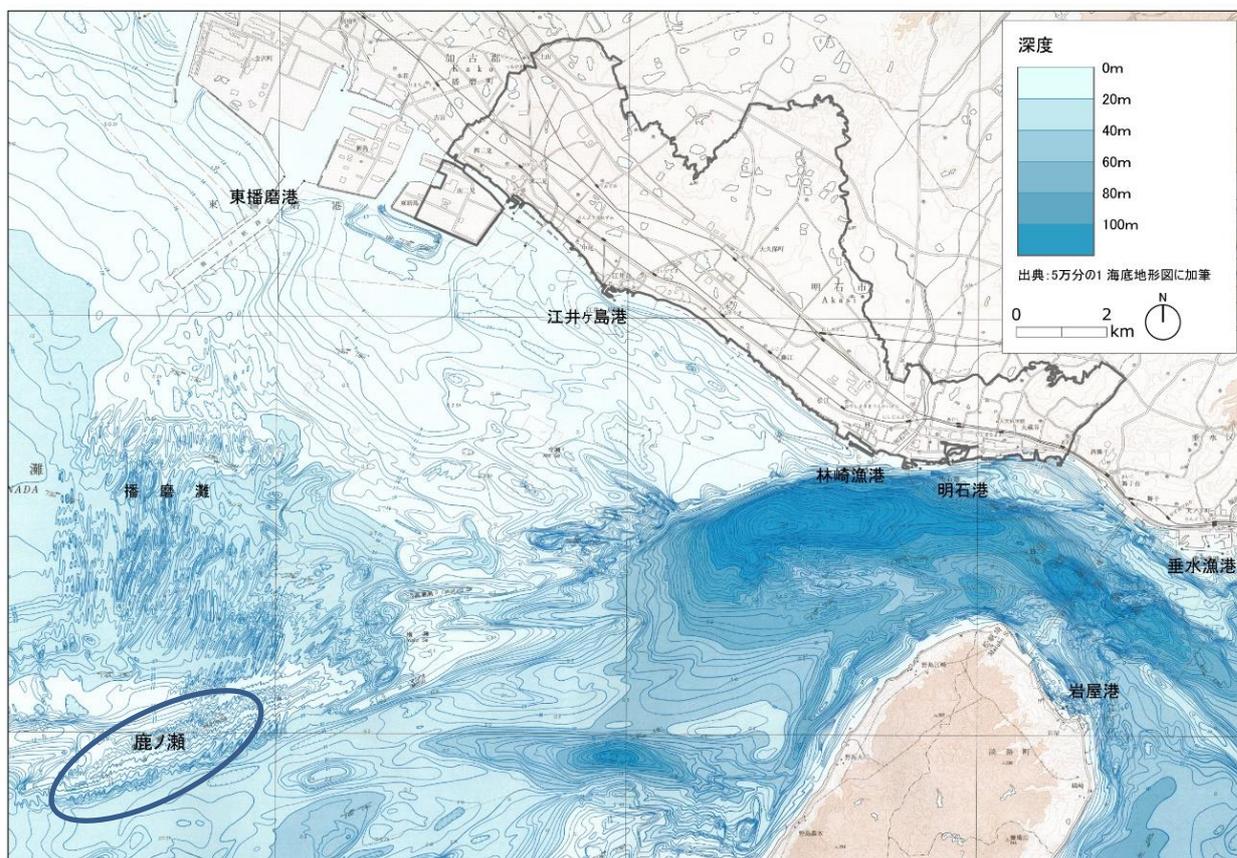


図 1 - 3 明石市沿岸の海底地形
(海上保安庁海底地形図)

(4) 地質

本市の地質をみると、多くは砂礫がち堆積物や砂、礫がち堆積物からなり、明石海岸では淡水性粘土層の上に屏風ヶ浦粘土層が載っている。

近畿地方の鮮新・更新世の代表的地層である大阪層群は、砂・礫層・粘土層などから構成され、粘土層は淡水成と海成からなる。

大阪層群は、大阪・播磨平野や京都・奈良盆地周辺の丘陵地などに広範囲に分布し、各地域で異なる堆積環境が関与したと考えられる。

明石・播磨地域の第四紀層のうち、本市以北に広く分布する第四紀層は主として流紋岩類や砂岩・礫岩・泥岩などからなる第三紀神戸層群などを基盤として狭隘な地帯に堆積している。第四紀堆積盆地の周縁はこれらの基盤岩類の厚い円磨された礫層からなる。

本市とその周辺及び神戸市西部に広く分布する明石累層は、特に本市外の西及び東に広がる台地周縁の崖や海岸、段丘堆積物の端に露出し、高位段丘層やそれより新しい地層に不整合に覆われている。

明石累層は、古生層、花崗岩・流紋岩類及び中新世の神戸層群を基盤として、砂・礫層、粘土層などからなり、段丘堆積物に覆われている。また最上部には海成粘土層を挟むとされている。

全体の中・上部にシルト～粘土層が比較的発達する層準があるが、本市林崎町から大久保町付近の明石海岸に露出する地層は、この比較的細粒な層相の部分にあたる。この付近の明石累層は、下位より林崎粘土層、藤江層（谷八木砂礫層）、屏風ヶ浦粘土層からなり、これらはすべて淡水層である。

林崎町から大久保町付近に分布する林崎粘土層及び屏風ヶ浦粘土層中には、それぞれ林崎火山灰層及び屏風ヶ浦火山灰層が挟まれている。なお、これらの粘土層からは、アカシヅウ化石やメタセコイアの植物化石などが産出している。

参考：地質調査所『明石地域の地質＜地域地質研究報告 5万分の1地質図幅＞』平成2（1990）年

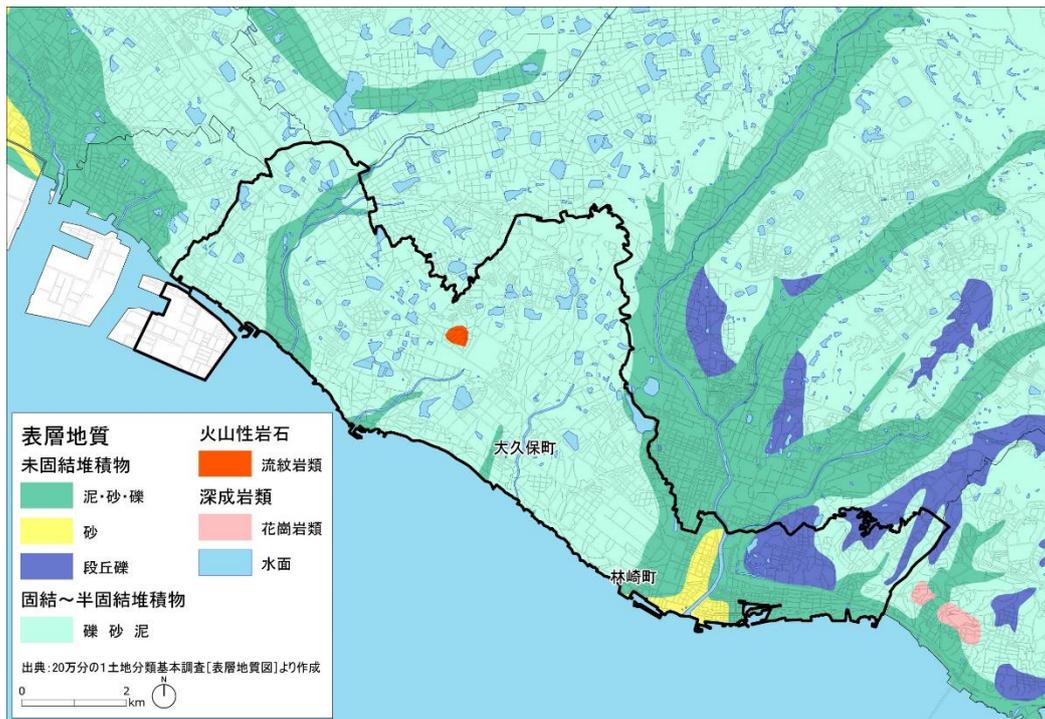


図1-4 明石市周辺の地質図

(5) 気象

本市は瀬戸内式気候に属し、年間を通じて降雨が少ない。平成31年/令和元(2019)年の年平均気温は16.5℃、最高気温が32～37℃(平成31/令和元年度：37.2℃)、最低気温がマイナス1℃(平成31/令和元年度：マイナス1.6℃)と比較的温暖である。

また、降水量については平年値1,073mm、日照時間は平年値2,075.5時間と、全国的に見ても雨が少なく、日照時間が長いのが特徴である。(測定地：二見町南二見)

本市の近年の大規模災害としては、平成7(1995)年1月17日に発生した兵庫県南部地震があげられる。同震災では多くの人的被害及び住宅被害もたらされた。

また、平成16(2004)年における一連の台風の襲来は市内の各地に浸水被害をもたらしたほか、市内で初の避難勧告発令、淡路地域などへの災害復旧支援などを経験した。

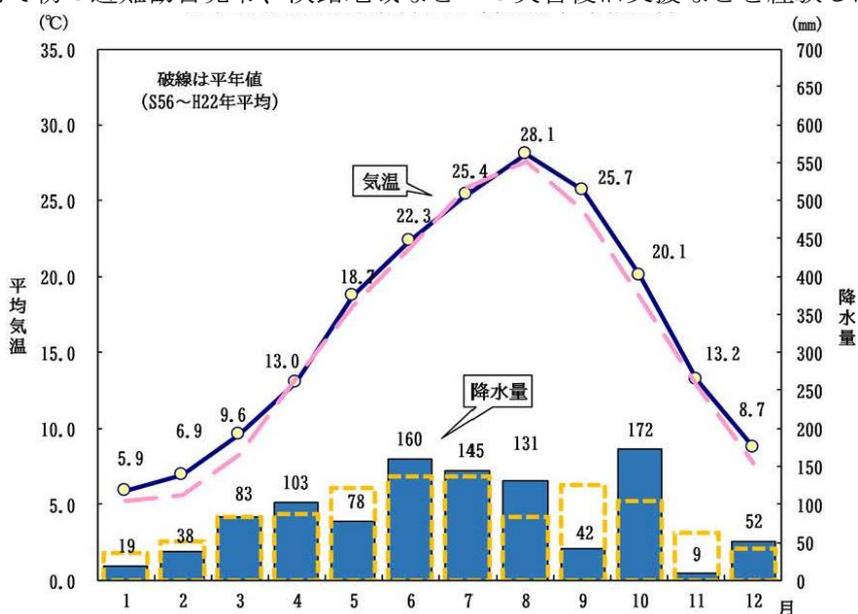


図1-5 平成31年/令和元年明石市の月平均気温・月間降水量
(明石市「明石市統計書 平成31/令和元年版」2019)

表1-1 明石市の気温

| 年次・月 | 平均気温 | | | 最高気温 | | 最低気温 | |
|-----------|------|------|------|------|-------|------|------|
| | 平均 | 日最高 | 日最低 | 極値 | 起日 | 極値 | 起日 |
| 平成31・令和元年 | 16.5 | 20.5 | 12.6 | 37.2 | 8月13日 | -1.6 | 1月1日 |
| 平成31年1月 | 5.9 | 9.9 | 1.9 | 13.0 | 5 | -1.6 | 1 |
| 2 | 6.9 | 10.5 | 3.3 | 14.3 | 4 | -0.5 | 18 |
| 3 | 9.6 | 13.7 | 5.4 | 18.5 | 21 | 1.0 | 9 |
| 4 | 13.0 | 17.2 | 8.8 | 24.3 | 22 | 1.8 | 2 |
| 令和元年5月 | 18.7 | 23.0 | 14.7 | 27.8 | 25 | 6.8 | 8 |
| 6 | 22.3 | 26.1 | 19.4 | 28.8 | 29 | 16.4 | 1 |
| 7 | 25.4 | 28.6 | 23.0 | 32.4 | 30 | 20.6 | 13 |
| 8 | 28.1 | 31.6 | 25.4 | 37.2 | 13 | 20.1 | 26 |
| 9 | 25.7 | 30.0 | 22.4 | 33.3 | 8 | 16.6 | 20 |
| 10 | 20.1 | 24.2 | 16.5 | 29.8 | 4 | 10.8 | 16 |
| 11 | 13.2 | 17.8 | 8.6 | 22.4 | 18 | 2.3 | 29 |
| 12 | 8.7 | 12.8 | 4.3 | 17.7 | 2 | 1.8 | 29 |

(明石市「明石市統計書 平成31/令和元年版」2019)

(6) 生態系

本市の自然環境は、二次林、ため池、河川、海辺に区分できる。

このうち、二次林についてみると、アベマキーコナラ群集が市域北東部に残り、また、市内各所には小規模ながら、常緑広葉樹林のカナメモチーコジイ群落が生息している。

「生物多様性あかし戦略」(平成 22 (2010) 年度) では、^{おおくぼちょうまつかげしんてん}大久保町松陰新田一帯、^{かねがさき}金ヶ崎公園、明石公園を里山林(二次林)の拠点として位置づけている。また、年間を通じて降水量が少ない本市では古くから多くのため池が築造され、現在も 100 を超えるため池がある。これらの二次林、ため池群、河川、海岸・沿岸海域をまとまりのある自然の拠点として選定し、これらの拠点の生物多様性を保全・回復し、相互が結び付き生物多様性のつながりを構築することが重要としている。

神戸市西区や稲美町からつながる本市大久保地域、魚住地域、二見地域に点在するため池は自然度が高く、大久保町西島の^{えいしがしま}新池や大久保町江井島の皿池はオニバスなどの希少な湿地性植物が生息する水辺である。

海岸線のほとんどは人工海浜であるが、整備されてから年月が経ち、西明石地域、大久保地域、魚住地域、二見地域の海岸には、ハマゴウやコウボウシバなどの海浜植物が生息し、浅瀬では甲殻類のヤドカリやカニが生息して、鳥類のシギやチドリ類がカニを捕食している姿も見られる。

また、海中に生息するアマモやアオサなどの海草や海藻類は、多くの小型魚類や稚魚などのすみかや産卵場となり、海の基礎生産を担う重要な場所となっている。

さらに、ウミガメも松江から魚住にかけての砂浜で上陸・産卵が確認されている。

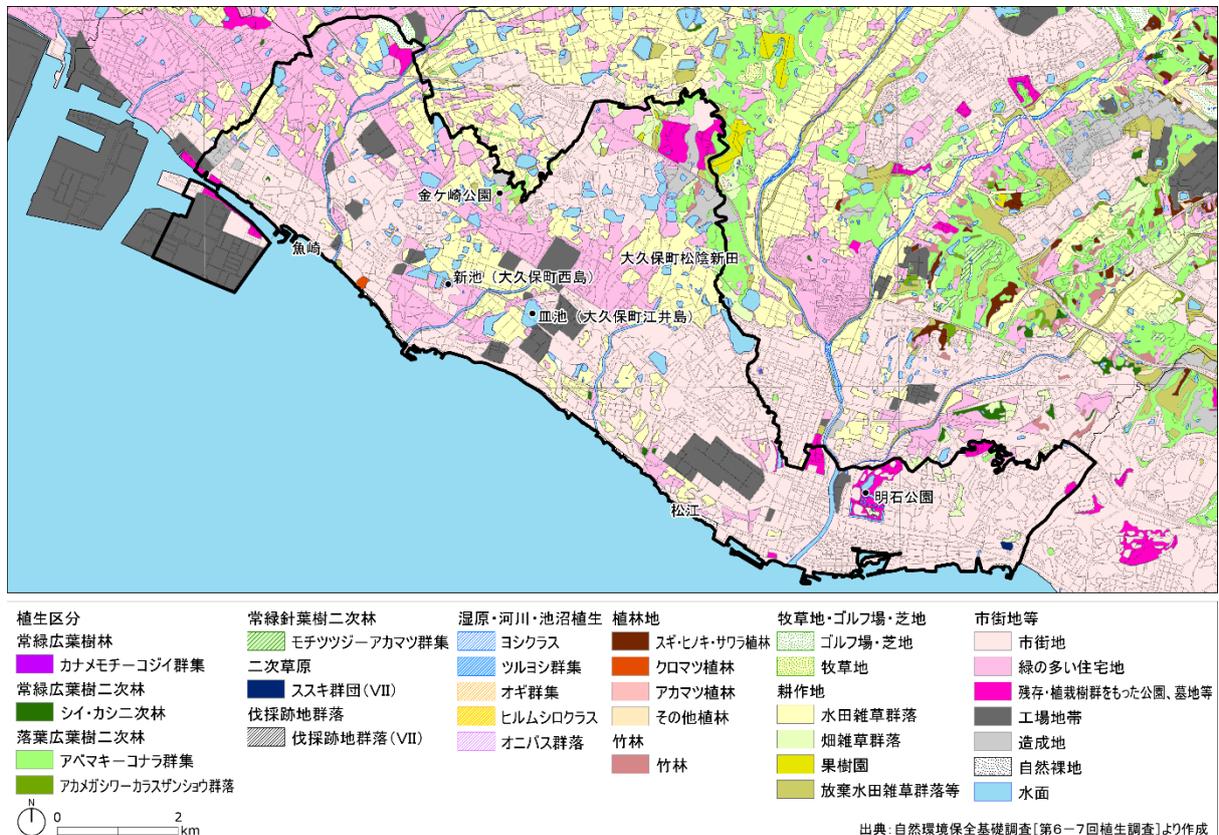


図 1-6 明石市の植生

2. 社会的状況

(1) 人口動態

本市の人口は、過去10年間は29万人超で推移してきた。平成20（2008）年以降わずかに減少した人口も平成25（2013）年以降は人口・世帯数ともに増加し、令和2（2020）年10月1日現在の人口は299,765人である。平成30（2018）年から平成31/令和元（2019）年の年齢（5歳階級）別社会動態の推移をみると、近年の本市における人口増加の主たる要因は、未就学児を中心にした子どもと25歳から34歳までの子育て層を中心とした新たな住民の流入にある状況が読み取れる。

しかし、本市のこれまでの人口動態や今後の政策の予測効果などを加味すると、総人口はゆるやかに減少に転じるものと考えられ、令和42（2060）年の総人口は約292,000人程度と推計している。

参考：（仮称）あかしSDGs推進計画（明石市第6次長期総合計画）：令和4（2022）年12月

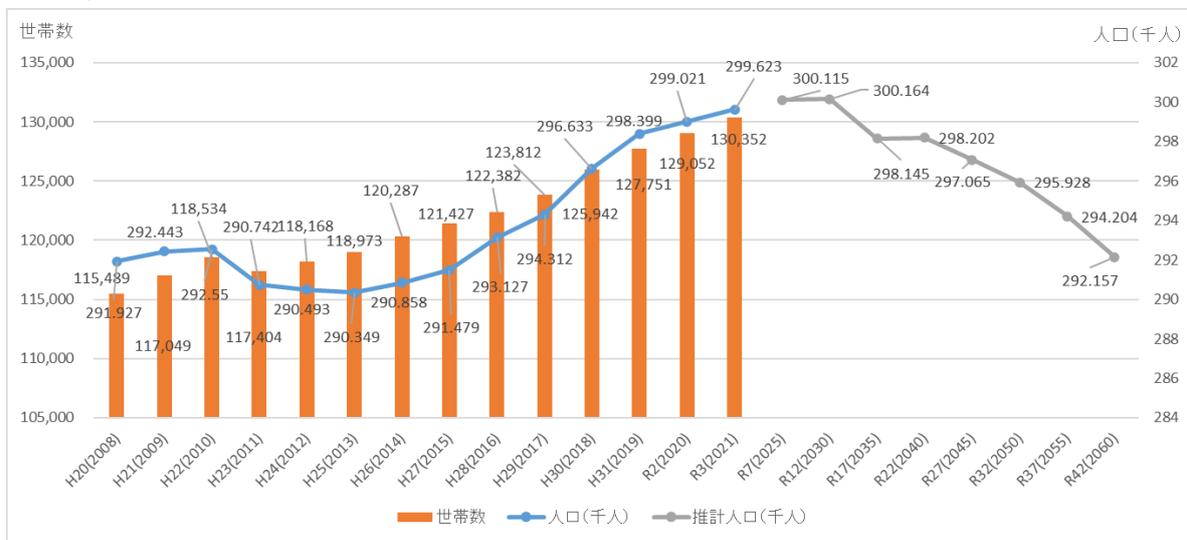


図1-7 明石市の人口及び世帯数の推移（平成20～平成31（2008～2019）年）と将来人口
（明石市統計書令和元（2019）年版）

註：将来人口推計「（仮称）あかしSDGs推進計画素案（2021年4月現在）」2021年11月に改めて推計予定

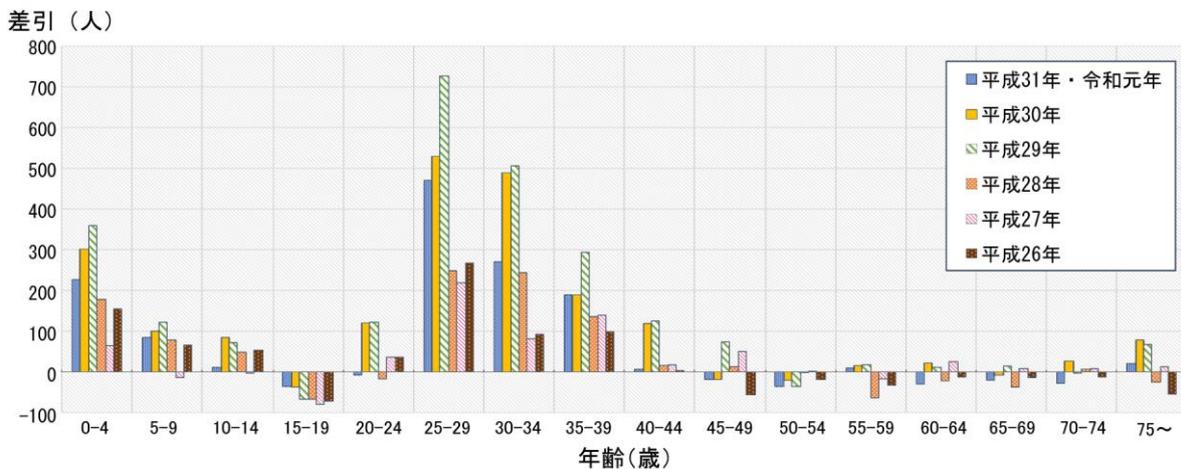


図1-8 平成30年から平成31/令和元年の年齢（5歳階級）別社会動態の推移
（転入数－転出数）

（明石市「人口の動き」令和元年（2020））

(2) 産業

本市の産業別就業人口の総数は平成 27 年国勢調査によると、その他分類を含む 127,816 人である。このうち、第一次産業が 1,380 人 (1.1%)、第二次産業が 32,750 人 (25.6%)、第三次産業が 87,453 人 (68.4%)、その他分類不能 6,233 人 (4.9%) と第三次産業が占める割合が高い。

① 第一次産業

第一次産業のなかで、漁業は本市の代表的な産業であるといえる。市域の東西 16 km にわたって瀬戸内海に接する沖合が日本有数の豊かな漁場であることから、古くから漁業が行われてきた。季節ごとに多様な魚が水揚げされるが、なかでもタイとタコは全国でも特に有名である。これは、海水の流れが速い明石海峡で育つ魚はよく運動し、エビやカニなどのエサを食べて育つので美味であるといわれている。また、冬にはノリの養殖が盛んに行われ、「平成 23 年海面漁業生産統計調査」では佐賀市、熊本市に次ぐ全国 3 位となる 17,960 トンの生産量を誇る。

農地面積は市域の約 8.8% であるものの、キャベツやブロッコリー、スイートコーンなどの野菜が栽培され、神戸や大阪などの大都市圏に出荷されている。また、魚住町清水付近で冬から春にかけて栽培されるイチゴは「清水のイチゴ」と呼ばれ有名である。

② 第二次産業

第二次産業のうち、地場産業としては、本市西部で地下水が豊富にわき出ることから、この水と近くで収穫される米を使った酒づくりが延宝 8 (1680) 年以前から江井島等で行われていたとされ、江戸時代から 300 年以上にわたって行われている。同じく酒づくりが盛んな神戸市の灘に対して「西灘」と呼ばれることもある。

本市では、地場産業以外にも明治時代以降、江戸時代の城下町で蓄積された経済力が基盤となって、漁船や船内のいけすに魚を生きのまま運ぶ生船なませんに関連する発動機や帆布の生産などを担う軽工業が発展し、大正時代には特徴的な企業が創業している。一方、昭和の初期からは市街地周辺部に川崎重工株式会社をはじめ重工業が立地するという軽工業と重工業という 2 つの流れがあったことが特徴的である。

高度経済成長期には、二見地域の人工島などの工場では電子部品などの製造業が立地し、兵庫県内では本市が 4 番目に第二次産業従事者や出荷額が多い都市となっている。

本市で生産されている工業製品としては、大型船のエンジン部品やショベルカー、バイク、重さを図る「はかり」、小型船舶などが特徴である。このうち、市内に本社を持つ企業のなかには、船舶用発動機関の製造から発展して大型機械の製造に特徴を持つ創業 100 年以上を超える企業もある。

③ 第三次産業

第三次産業についてみると、次表に示すように、事業所計が 1,688 か所で、就業者数は全体で 13,918 人である。

第三次産業のなかでも特に、「魚の棚商店街」は明石城下町からの歴史を持つといわれ、「市民の台所」であると共に市の代表的な観光地ともなっている。現在の「魚の棚商店街」の場所で商売が始まったのは約 400 年前のことといわれている。初代明石城主・小笠原忠政おがさわらただまさが長野県松本から明石へ移封されたのが元和 3 (1617) 年で、その翌年から明石城築城を開始し、町の東部を商人と職人の地区、中央部を東魚町、西魚町など商業と港湾の地区、西部の樽屋町や材木町とその

海岸部には回船業者や船大工などと漁民が住む地区と町割りがされた。その東魚町、西魚町にあたるのが現在の「魚の棚商店街」の原型になる。「魚の棚」の名称は魚商人が大きな板を軒先にずらりと並べ、鮮度を保つために並べた魚に水を流していた様子からきている。本市では昔から「うおんたな」と呼ぶ。町ができた当時の東魚町では、鮮魚と練り製品の店が集められ、東魚町より西に位置する西魚町には塩干物の問屋と小売りが並んでいた。元文年間（1736～41）には東・西魚町で鮮魚店が56軒、塩干物店が50軒あったといわれる。大正3（1914）年、土の道であった商店街に石畳が敷かれた。魚を扱うため多量の水を使うことから、水はけの良い御影石が敷き詰められ、早朝から下駄を履いて歩く足音が響いていたという。しかし、昭和24（1949）年の明石駅前大火の後、駅前地区の区画整理事業に伴う整備の際に石畳は撤去されてアスファルト舗装に変わった。さらに昭和36（1961）年に、アーケードが造られた。昭和52（1977）年に藤江に公設卸売市場ができるまで、魚の棚の鮮魚店は仲買と小売りを兼ねていた。毎朝4時になると始まる威勢の良いセリが9時頃まで続き、その後は各店が小売りのための準備にかかる。午前中の小売り後、今度は明石港で水揚げされた昼網のセリが始まって、また活け魚が店頭並んだ。これが「明石の昼網」と呼ばれた。そのため、各商店の家族はほとんどが店舗の2階に暮らし、従業員も住み込み、魚の棚商店街は生活空間でもあり、子どもたちの遊び場でもあった。

昭和62（1987）年には一代目のアーケード老朽化が進み、現在のアーケードである二代目のアーケードへと改修され、明石市民の利用だけでなく、多くの観光客を迎える商店街として発展してきた。

表1-2 小売業の業態別事業所数、就業者数、年間商品販売額他

| | 業態分類 | 事業所数 | | 就業者数 | | 年間商品 販売額 万円 | その他の 収入額 万円 | 売場面積 ㎡ | |
|-----|---------------------------|-------|-----|------|--------|-------------------|-------------------|-----------|---------|
| | | 法人 | 個人 | 人 | 人 | | | | |
| 全市計 | 合 計 | 1,365 | 771 | 594 | 11,225 | 10,925 | 17,279,085 | 550,854 | 227,147 |
| | 1. 百貨店 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| | 2. 総合スーパー | 2 | 2 | - | 567 | 567 | x | x | x |
| | 3. 専門スーパー | 64 | 61 | 3 | 2,822 | 2,778 | 4,809,482 | 17,474 | 86,100 |
| | うちホームセンター | 5 | 5 | - | 288 | 252 | 488,661 | 13,093 | 20,729 |
| | 4. コンビニエンスストア | 53 | 26 | 27 | 962 | 962 | 1,062,764 | 31,718 | 6,079 |
| | うち終日営業店 | 44 | 18 | 26 | 830 | 830 | 930,391 | 31,715 | 5,179 |
| | 5. 広義ドラッグストア | 32 | 28 | 4 | 488 | 464 | 962,056 | 283 | 17,352 |
| | うちドラッグストア | 26 | 24 | 2 | 379 | 355 | 752,081 | 283 | 12,598 |
| | 6. その他のスーパー | 61 | 39 | 22 | 396 | 381 | 395,140 | 19,404 | 7,824 |
| | うち各種商品取扱店 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| | 7. 専門店 | 849 | 463 | 386 | 4,296 | 4,128 | 5,805,699 | 373,146 | 49,753 |
| | 8. 家電大型専門店 | 4 | 4 | - | 118 | 109 | 347,064 | 29,784 | 6,171 |
| | 9. 中心店 | 266 | 128 | 138 | 1,430 | 1,397 | 2,138,965 | 77,395 | 28,283 |
| | 10. その他の小売店 | 2 | 1 | 1 | 11 | 11 | x | x | x |
| | うち各種商品取扱店 | 2 | 1 | 1 | 11 | 11 | x | x | x |
| | 11. 無店舗販売 | 32 | 19 | 13 | 135 | 128 | 446,695 | 1,569 | - |
| | うち通信・カタログ販売、 インターネット販売 | 12 | 9 | 3 | 41 | 41 | 85,193 | 919 | - |

(平成26(2014)年商業統計調査)

④観光

本市では、食のまち、海峡のまち、歴史のまち、時のまちの4つを観光の特徴としている。食のまちではタコ焼きの原型といわれる「明石焼（玉子焼）」や鮮魚を、海峡のまちでは明石海峡や海岸を、歴史のまちでは明石城跡などの歴史文化遺産を、時のまちでは東経135度日本標準時子午線上に立つ明石市立天文科学館などの施設や設備などの観光情報を発信している。

本市の観光客は、魚の棚商店街ほか、明石公園などへの訪問が多く、年間観光客数は、約560万人（平成29(2017)年度）である。

(3) 土地利用

本市は、市域全体が阪神都市圏との強い関わりを持ち、市街地が連坦している。

明治時代には、図1-10や図1-11に示すように、明石周辺、大蔵谷周辺、大窪周辺の町並み、林、江井島、魚住、東二見、西二見などの漁村集落以外の地域は農地が広がっていた。

現在、本市西部の二見臨海工業団地をはじめとして、JR山陽本線及び山陽新幹線の西明石駅南側やJR山陽本線の大久保駅南北に比較的大規模な工場が立地している。商業地はJR山陽本線及び山陽電鉄明石駅周辺のほか、国道2号沿道などに分散して立地している。

また、都市的土地利用が進み、あわせて神戸・大阪方面への通勤圏内としての利便性の高さなどから市域の広範囲に住宅地が広がっている。

中心市街地においては、大型商業施設の退店などが続いたが、平成22(2010)年に策定された明石市中心市街地活性化基本計画ならびに第2期中心市街地活性化基本計画に基づき、再開発事業などが進められたところである。

郊外部については依然として住宅地としての土地利用ニーズが高く、鉄道駅周辺の高層共同住宅に代わり、戸建専用住宅地としての土地利用が伸展している。

市の中部及び西部においては、田や畑などの農用地が点在し、総面積は約490ha^{*1}である。

また、農地に隣接して河川地及び湖沼(ため池)が立地している。ため池の総数は103か所で、農業用ため池で最も大きい皿池や大池、17号池、新池などの大規模なため池の他、オクワハン行事が行われる新池や行基が亡くなった人を弔うために造ったとされる香盤池など謂れのある池もある。

市の北部においては、大久保町松陰新田地区を中心に山林が占め、総面積は約116ha^{*1}である。

農地の転用は近年増加傾向にあり、主に住宅用地に転用されている。また、工場地帯が減少し、住宅地が増加する傾向も見られる。

※1「平成31/令和元年度明石市統計書」による

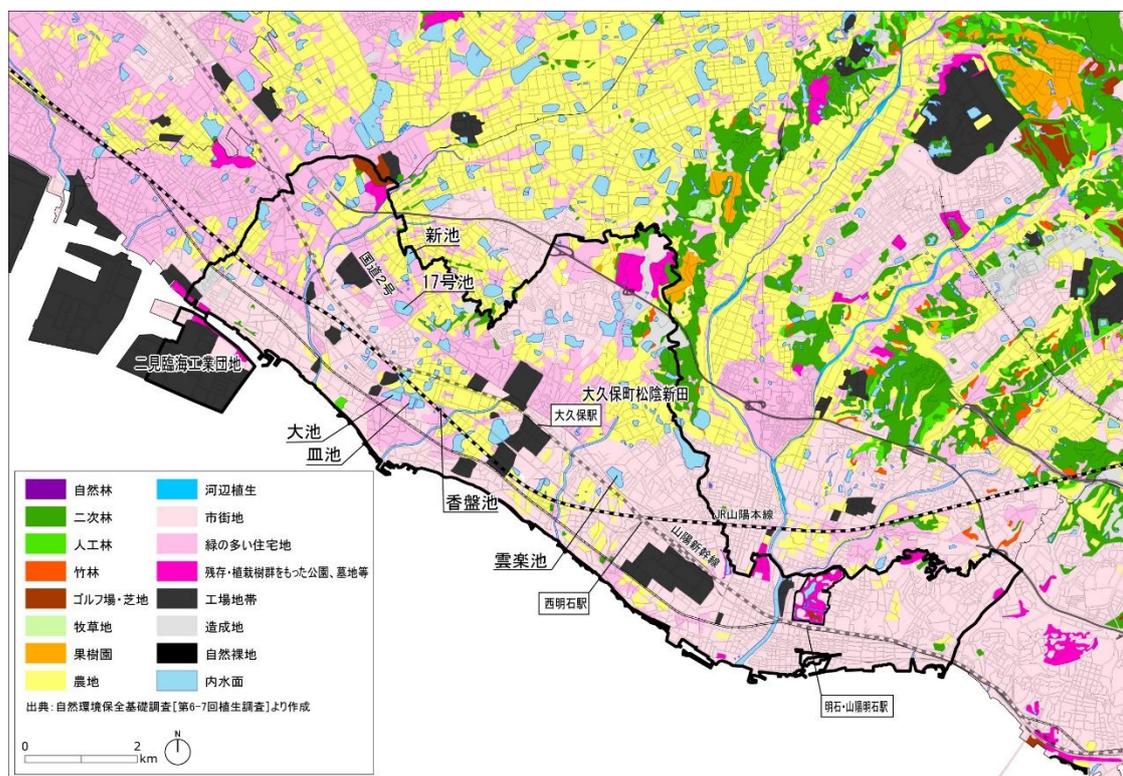


図1-9 明石市の土地利用

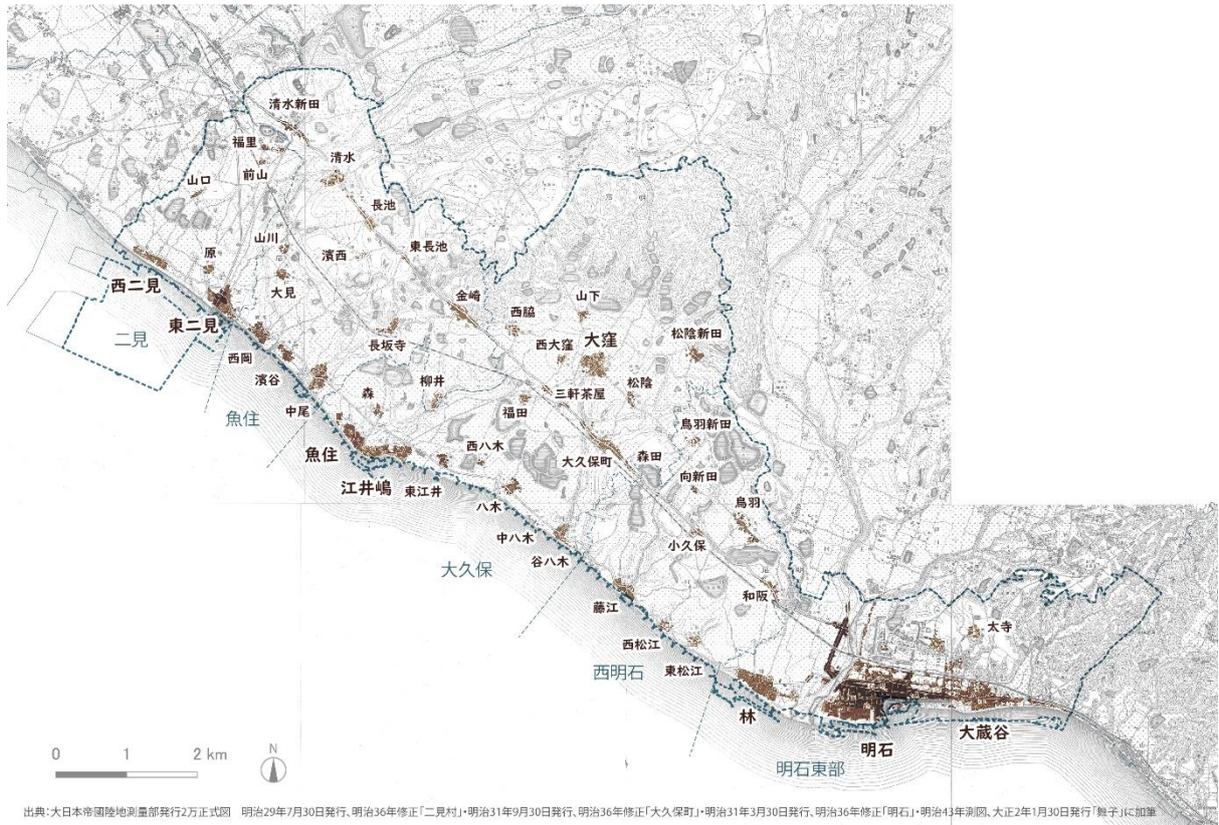


図1-10 明石市全域の明治時代の土地利用(明治29(1896)年発行)

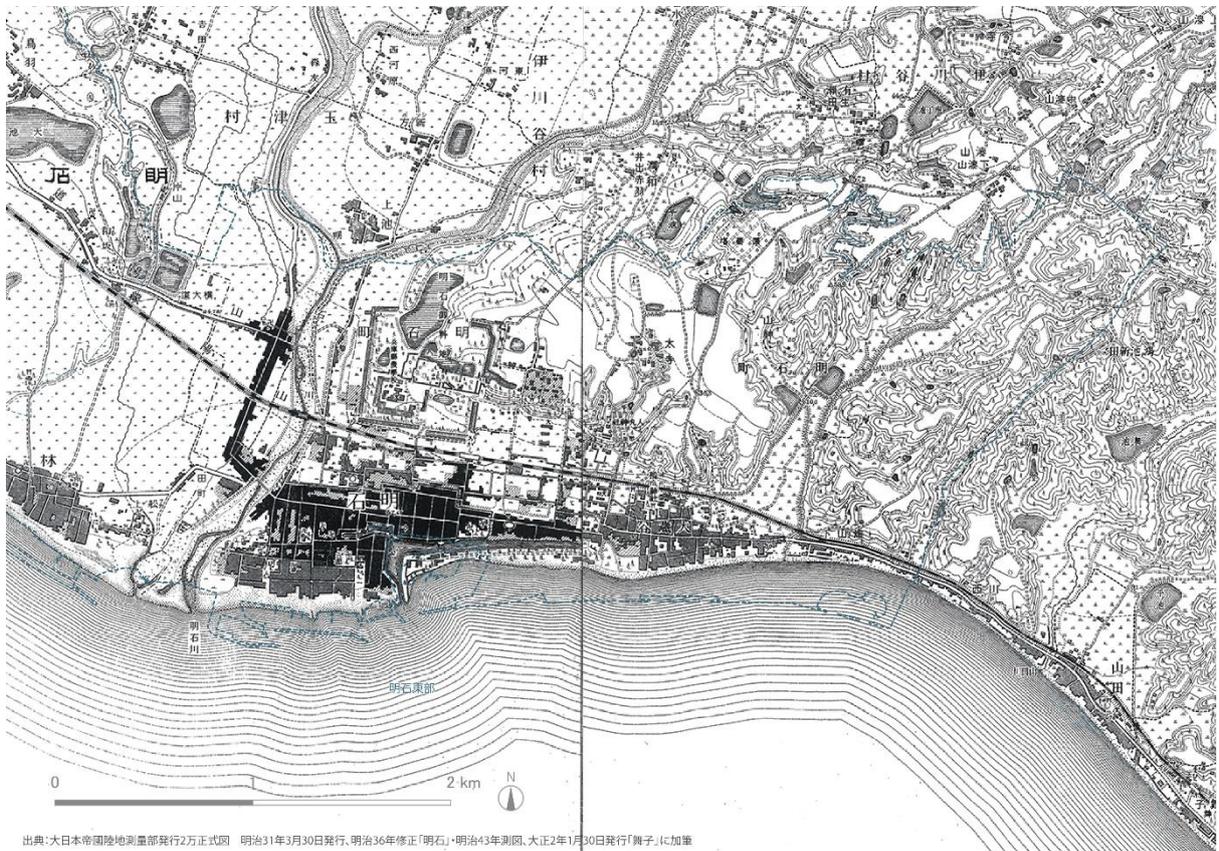


図1-11 明石城下ならびに大蔵谷周辺の明治時代の土地利用(明治31(1898)年発行)

(5) 景観

本市の景観は、海岸線や田園・ため池などから形成される「自然景観」、歴史的町並みや歴史的建造物から形成される「歴史景観」、住宅地、商業地、工業地などから形成される「市街地景観」に大別される。また、地域の生活を反映した「生活景観」を加えると、明石の景観は4つの景観類型で構成される。

自然景観は、大阪湾から播磨灘にかけて残された数少ない砂浜を持つ松江や藤江の海岸線及び、中部や西部に広がる田園やその中に点在する17号池などの多くのため池、明石川や谷八木川などの河川、金ヶ崎公園の緑地などで構成される。

歴史景観としては、明石城跡や織田家長屋門、西国街道や浜街道沿いの古くからの町並み、酒所である明石を象徴する酒蔵、市民の文化活動の殿堂である中崎公会堂や漁業と深い関連のある住吉神社など、古くからの建造物などで構成される。

一方、市街地景観としては、松が丘や太寺、高丘などの住宅地、明石駅周辺に代表される商業地、西明石や二見に見られる工業地などで構成される。

自然景観、歴史景観、市街地景観が織りなす明石の景観の特性として、次の諸点があげられる。

明石の景観の魅力のひとつとして、美しい海岸線とそこから望む明石海峡の大景観・眺望景観、時間と共に変化する夕陽の景観などが特筆される。

また、明石は「魚のまち」としての景観をつくりあげている。優良な漁場である明石海峡は、古くから漁業が盛んに行われ、明石を「魚のまち」として成長させた。魚の棚商店街の活気ある風景や昼網のせりの様子、漁港の船溜り、干しダコの風景は、明石の生業を物語る景観である。

さらに、城下町明石の名残をとどめる明石城跡や織田家長屋門のほか、東の灘に対して西灘と並び称される酒所・明石を象徴する酒蔵などは、「歴史のまち」の景観を伝えている。

また、住宅地にある趣のある小径やそこにたたずむ祠や碑など、暮らしに溶け込んだ本市ならではの景観が存在している。

このように、「明石らしい景観」は、地形や生業、歴史や暮らしなど、本市の地域特性から創出されたものであるといえる。

明石市都市景観形成基本計画では、本市の都市景観の現状と成り立ちを踏まえて景観まちづくりの目標として、「自然にやさしい景観形成」、「歴史をつなぐ景観形成」、「市街地がうるおう景観形成」、「生活に溶け込む景観形成」の4つを掲げ、右図に示すように、大景観、中景観、小景観のゾーン区分と主要な道路軸や河川軸、シンボルポイントやまちかどポイント、歴史ポイントや憩いのポイントにより、今後の景観形成を進めていくものとしている。また、市域外ではあるが、明石海峡大橋や淡路島、播磨なども明石の景観を成しているとしている。

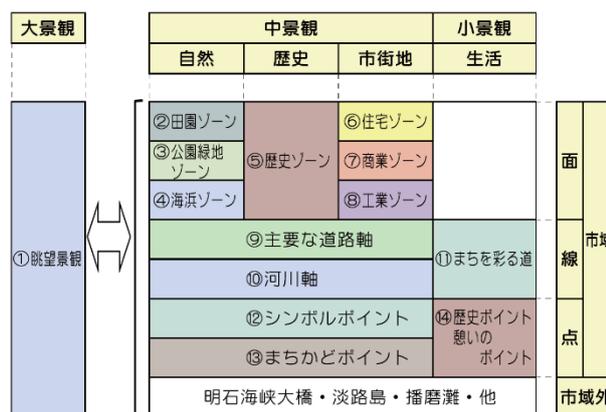


図1-13 明石市の景観類型の設定
(明石市「明石市都市景観形成基本計画」
平成22(2010)年)

(6) 法的規制や法的な位置づけ

①都市計画法

本市では昭和46(1971)年3月に市街化区域及び市街化調整区域の最初の決定がなされ、およそ5年ごとに見直しが行われ、現在に至っている。令和2(2020)年の統計によると、市域4,942haのうち、市街化区域は3,889ha、78.7%を占め、市街化調整区域は1,053ha、21.3%である。また、用途地域別にみると住居系用途が70%を超え、そのうち第一種住居地域が29%と最も多い。

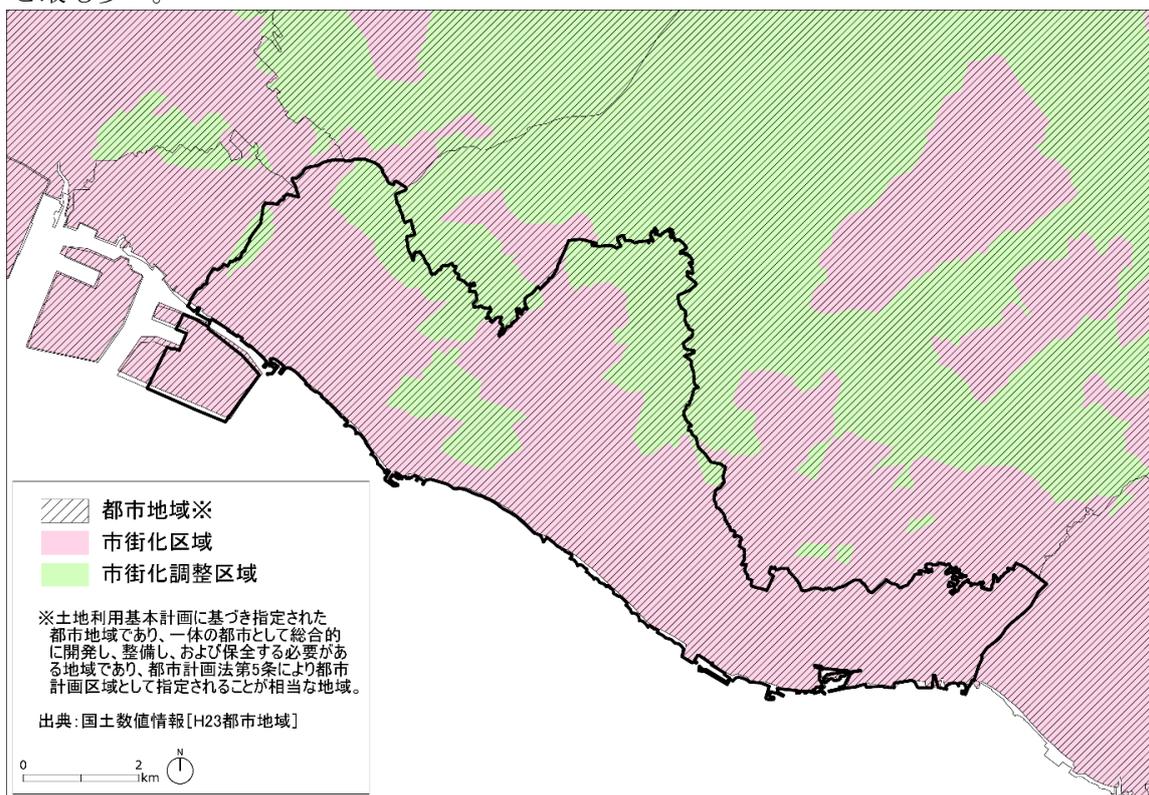


図1-14 明石市の市街化区域と市街化調整区域

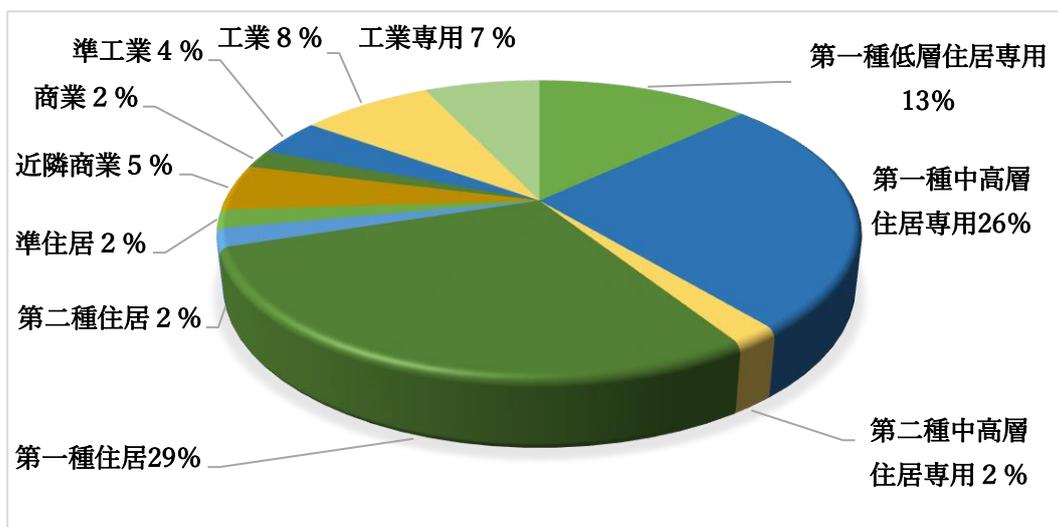


図1-15 市街化区域内の用途地域の割合

②農業振興地域の整備に関する法律等

本市では、市域境界の北部と中部の魚住地区に農用区域が設定されている。また、農用区域を取り囲むように農業振興地域が設定されている。農用地 709ha のうち、市街化区域内農地は 315ha (44.4%) で、市街化調整区域内の農地が 394ha (55.6%) である。また、農業振興地域に 852ha が指定されている。このうち、農用地が 394ha (55.6%) であり、農業振興地域内の農用地が 200ha (28.2%)、農振白地地域が 194ha (27.4%) である。※¹

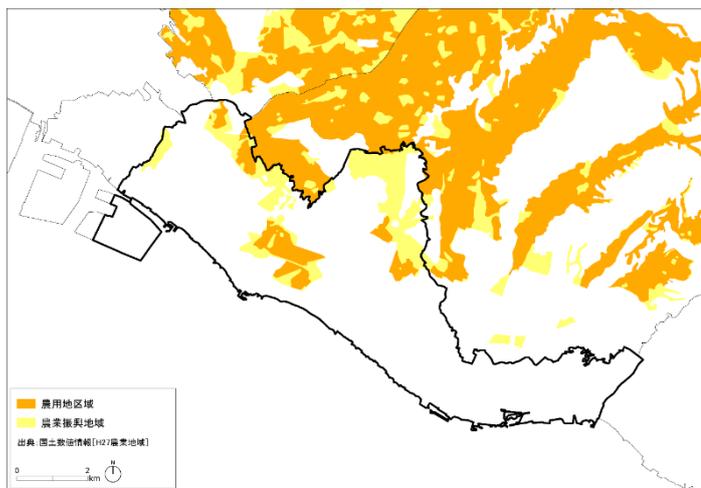


図 1-16 農用区域ならびに農業振興地域の指定

しかし、平成 12 (2000) 年から平成 22 (2010) 年の 10 年間に宅地が約 103ha に増えるなど、農地の住宅用途への転用が増加し、農地は減少傾向にある。平成 30 (2018) 年 7 月時点の耕地面積は「平成 30 年作物統計調査/面積調査」によると田 414ha、畑 17ha である。「農林業経営体調査結果」によると、平成 27 (2015) 年現在で総農家数は 1,044 戸、そのうち販売農家が 499 戸、自給的農家が 545 戸である。農業就業者数は 761 人であるが都市型農業であることから兼業農家が 339 戸と多く、一農家あたりの耕地面積は小さい。

※¹：明石市農業基本計画（平成 24 (2012) 年 3 月：明石市）

③漁港漁場整備法

本市では林崎、松江、藤江、魚住の 4 つの漁港が整備されている。これらの漁港ならびに関連施設を中心に、稚魚の放流、マダコの増殖事業などを推進している。

一方、漁港周辺では、古くからの漁撈集団と祭祀集団の一致を示す町割りや神社、伝統的な建築様式の民家などが継承されている。

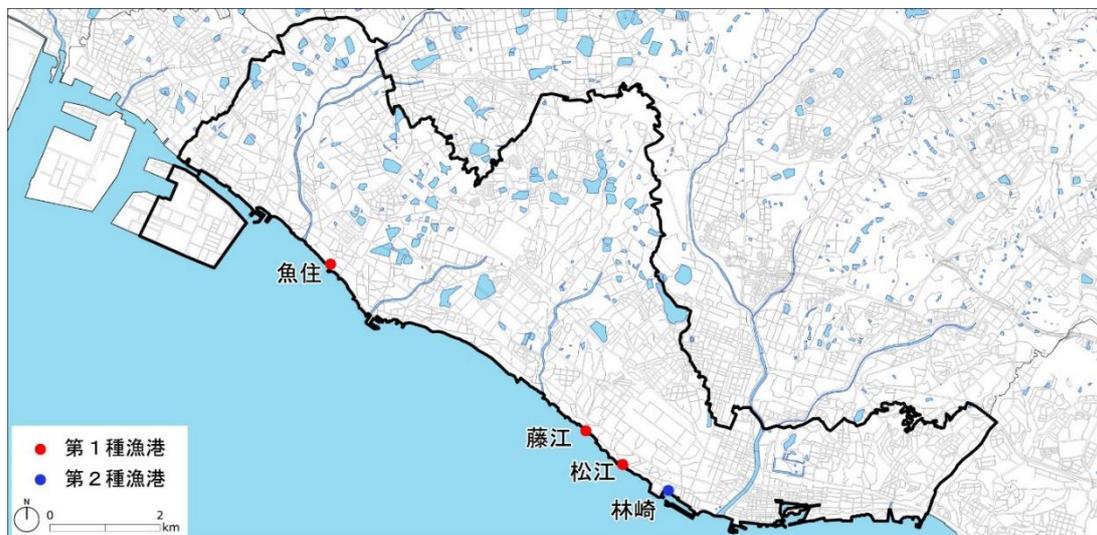


図 1-17 漁港の位置

④災害対策基本法・土砂災害防止法

災害対策基本法（昭和 36 年法律第 223 号）第 42 条及び明石市防災会議条例（昭和 38 年条例第 16 号）に基づき、明石市地域防災計画が策定され、地震災害や風水害から住民の生命、身体、財産を守るため、市及び防災関係機関がその全機能を発揮し、相互に協力して災害予防、応急対応に当たることが定められている。

平成 26（2014）年 2 月の兵庫県・南海トラフ巨大地震津波浸水シミュレーション結果によると、明石市の最高津波推移は 2.0m、最短到達時間は 115 分とされている。

明石駅や明石城跡を含む本市東部では、津波の警戒が必要とされる標高 3 m に満たない土地が J R 山陽本線高架橋南側一体から明石駅の北東部にかけて広がっており、同地域には、光明寺の和鐘、旧波門崎燈籠堂などの文化財が立地している。

明石城跡を含む明石公園や小中学校が避難場所に位置付けられているが、明石公園も北部の一部を除いて液状化の危険性が高い区域にあたる。

また、土砂災害防止法に基づき兵庫県が指定した土砂災害警戒区域の要件（急傾斜地の勾配 30 度以上あるもの、急傾斜地の高さが 5m 以上あるもの）に該当する箇所として、令和 3（2021）年 3 月時点で 33 か所が急傾斜地として指定されている。

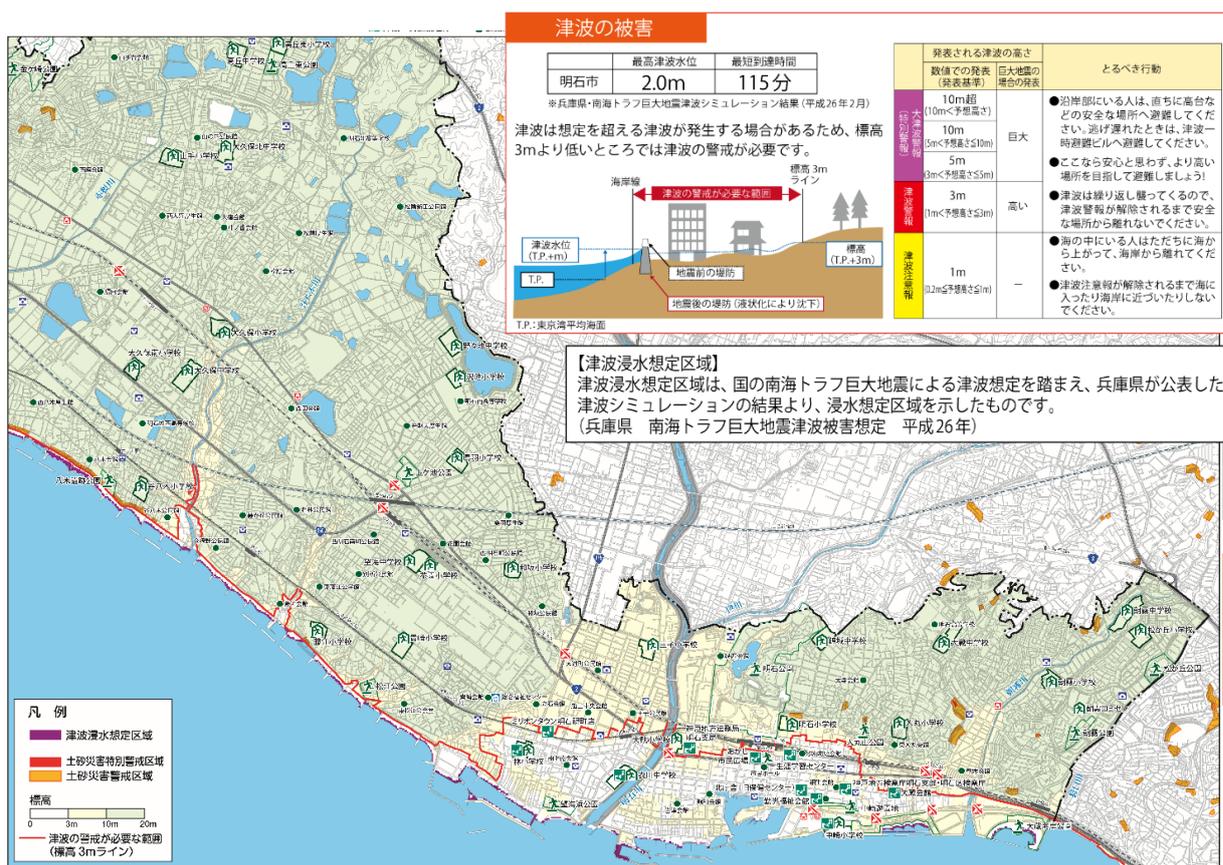


図 1-18 明石市大久保・西明石・明石の地震・津波に関する危険区域
(明石市「明石市地震災害ハザードマップ」令和元（2019）年 5 月改訂)

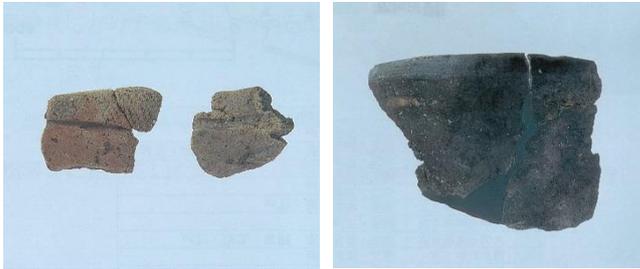
3. 歴史的背景

(1) 先史

①縄文時代

縄文時代前期には気候が温暖な時期があり、縄文海進と呼ばれる海水面が上昇する現象が起こった。最も上昇した際には現在の海水面よりも3mも高かったとされている。このため、本市では現在、明石城の^{やぐら}櫓がある台地の近くまで海が入り込んでいた。その後、海水面が下がるとともに、河川が運ぶ砂などによって徐々に埋められて陸地となり、当時の人々は海沿いの場所で漁も行きながら小規模な集落を営んでいたと考えられている。

^{だんきゅうがい}段丘崖に近い山下町では縄文時代後期初頭の中津式土器が、また、東仲ノ町では後期後葉の元住吉山I式の土器が見つかり、この地域で暮らし始めた当初の人の足跡を辿ることができる。また、^{ふじえいでのうえ}藤江出ノ上遺跡や^{ふじえかわぞえ}藤江川添遺跡などでも縄文時代草創期から晩期にかけての土器が見つかり、



縄文土器 (左：中津式 右：元住吉山I式)

(明石市立文化博物館『01 特別企画 発掘された明石の歴史展
～まちに眠る古代の姿～』平成13(2001)年)



縄文土器が出土した山下町の発掘現場
(明石市立文化博物館『01 特別企画 発掘された
明石の歴史展～まちに眠る古代の姿～』
平成13(2001)年)

②弥生時代

弥生時代になると、大陸から朝鮮半島を経て米づくりの技術が伝わってきた。現在、明石市立文化博物館が立地する台地の縁辺部の上ノ丸遺跡からは、底部に靱跡の付いた弥生土器が出土しており、米がつくられていたことが検証される。

藤江川、谷八木川、赤根川などの河口付近からもこれまでに弥生土器が見つかり、川の下流域の低湿地を利用して米づくりが行われていたと推定される。また、^{おおあかしちょう}大明石町や^{すずりちょう}硯町からは弥生時代前期から後期にかけての土器が発見されている。こうした土器が出土する地点は、自然堤防や^{さたい}砂堆(小高い砂の丘)の上に比較的集中する。

弥生土器の中には、イイダコをとるための小型のタコ壺が見つかり、タコ壺はタコが穴に潜む習性を利用して捉える漁具で、この当時からすでにイイダコ壺漁が行われていたことがわかる。弥生時代のイイダコ壺はコップ形で、口縁部には紐を通すための穴があけられたものであった。



弥生時代のイイダコ壺検出状況
(明石市立文化博物館『01 特別企画
発掘された明石の歴史展～まちに眠
る古代の姿～』平成13(2001)年)

(2) 古代

①古墳時代

古墳時代には地域の有力な豪族の墓である古墳が市内各地で造られるようになる。市内で最古の古墳としては、魚住町にある幣塚古墳がある。4世紀末の古墳で、ここからは神戸市の五色塚古墳の埴輪と同じ工人の手によるとされる埴輪が見つっている。古墳時代後期の古墳としては、魚住町寺山古墳や藤江カゲユ池古墳などがある。寺山古墳は市内唯一の横穴式石室をもつ古墳で、石室内から鳳凰文の銀象嵌が施された刀装具などが見つかり、朝鮮半島とも関わりをもった人物が葬られていたと考えられている。さらにその近くに存在する赤根川金ヶ崎窯は6世紀前半の須恵器窯で、ここからも朝鮮半島と深いつながりをもつ角杯形土器が見つっている。この窯は、その後、本市で活発化する窯業生産の開始時期を示すものである。

東仲ノ町の発掘調査では古墳時代後期の墓が見つっている。一辺が約11mで周囲に溝をめぐらした方墳で、溝の中から丸木舟を利用した木棺が出土した。この木棺は、長さ4m、幅約55cmで、舟の底部分を棺に利用し、側板や仕切り板などを入れ、蓋には舟の部材を用いている。

東仲ノ町で発掘された丸木舟を利用した木棺に葬られた人物は、眼前の明石海峡で活躍した人物であった可能性が高いと考えられる。



幣塚古墳



五色塚古墳と田中窯



寺山古墳出土

角杯形土器



刀装具

刀装具

寺山古墳出土品

(明石市『発掘された明石の至宝』)

令和元(2019)年

②奈良時代

奈良時代には、人の移動、物の輸送のために全国に七道が位置付けられたが、そのうち本市では、大宰府と都を結ぶ街道である古代山陽道が東西を貫き、駅家が置かれたことが特徴である。

古代山陽道は、二見町福里において発掘調査から確認されている。古代山陽道は道幅が10m以上あり、沿道には約30里(16km)間隔で瓦葺の駅家が設けられていた。市内には、明石駅家と邑美駅家の2つが存在していたとされる。そのうち明石駅家は、菅原道真が立ち寄ったことが『菅家文草』に記載された駅家であるが、その所在地については諸説あり、不明である。一方の邑美駅家は、魚住町の長坂寺遺跡にあたるということが発掘調査の結果判明している。



古代山陽道跡(福里)

また、東仲ノ町の調査では東西方向にのびる道の遺構も見つかっている。律令時代に敷かれ、都と大宰府とを結ぶ主要な道であった古代山陽道のうち須磨から明石までのルートについては諸説があり、一般的には崖が海に迫った海岸沿いの狭い道を避け、須磨から白川峠を経て伊川谷方面へ入り、本市の北側へ出たという説が有力視されていた。大蔵中町遺跡^{おおくらなかつまち}で駅家に多く使われる播磨国府系瓦が見つかったことにより、周辺に駅家の存在が推定でき、海沿いのルートを通っていた可能性が高くなった。

仏教文化が伝わり各地で寺がつくられていた時代の市内の最古の寺院として太寺廃寺^{たいでら}がある。

古代の人々にとっては本市が畿内と畿外との境界にあたることから、ものやひとの往来が活発であり、ここを通る際によく歌の題材としてとりあげられた。万葉集の歌人である柿本人麻呂や山部赤人は西方に旅立つ際に本市を通り、「明石大門」や「藤江の浦」を題材にした歌を詠んでいる。

③平安時代

平安時代の本市は、古代山陽道の往来、摂播五泊の一つである魚住泊による海の往来、沿岸域における寺院の建設、背後の寺領、神領での稲作・畑作が行われていた。

平安時代に入ると、最澄が天台宗を、空海が真言宗を開いた。本市においても弘仁2（811）年、空海が赤松山（現在の明石城址）に湖南山楊柳寺^{こなんさんやうりゆうじ}を建立したと『月照寺縁起』^{げつしょうじえんぎ}に記載されている。また、延長5（922）年に『延喜格式』^{えんぎかくしき}ができ、これによると明石郡の式内社は大3座、小6座が確認されている。

海の航行についてみると、奈良時代の末期に行基が魚住の泊を播磨・摂津間の標準泊所の一つに設定したが、以来100年ほど経て荒廃していた泊が、天長9（832）年になって修築され、瀬戸内海を航行する人々も増えてきた。そのなかで、明石と淡路島との往還の最初の記述は『続日本紀』に見られ、承和12（845）年に淡路島の石屋浜^{いわやま}と明石浜との間にはじめて船と渡し守がおかれたと記載されている。

また、寛弘元（1004）年頃、紫式部による『源氏物語』「明石の巻」は本市を背景にして描かれたとされ、無量光寺^{むりょうこうじ}の傍の鶯の細道^{せいらくじ}、善楽寺^{ぜんらくじ}、朝顔光明寺^{あさがおこうみょうじ}などはそのゆかりの地とされる。このほか、菅原道真^{すがわらのみちざね}が明石の駅家に立ち寄り漢詩を駅長に与えたともいわれている。

平安時代の末には、林崎三本松窯で焼かれた瓦が多量に平安京の寺院や離宮に運ばれた。その背景に受領国司などが自らの地位の安泰や新たな官職を得るために寺院などの造営に積極的に関与したことがあげられる。

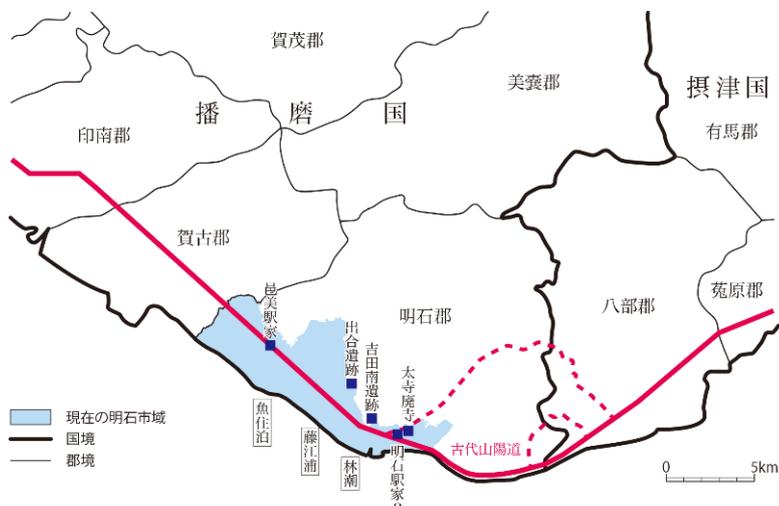


図 1-18 古代明石郡ならびに周辺国の様子

(3) 中世

①鎌倉時代

鎌倉時代に入ると、市内で掘立柱の建物などが確認されている。出土遺物では、片口鉢や甕かめなど日常雑器として用いた須恵器がある。これらは本市魚住の中尾川流域と赤根川流域で盛んに焼かれていたものである。魚住焼と呼ばれるこれらの焼き物は、東は関東から西は九州まで広く流通しており、13世紀には西日本最大の須恵器すゑきの生産地となった。



魚住焼（魚住古窯跡群）
（明石市『明石の古代Ⅱ』
平成26（2014）年）

また、この時期に中国から入ってきたと思われる白磁や青磁などの碗、皿、壺類も遺跡から出土している。

②室町時代

室町時代の地層からは本市藤江産と考えられる羽釜や土鍋などが数多く見つかっており、14世紀から15世紀にかけ、この周辺は土器の生産地であったと考えられる。

明徳4（1393）年には大久保町西脇に西大寺末寺の報恩寺ほうおんじが建てられたことが発掘調査によって明らかになった。寺の造営には大和の瓦大工たちばなよしげ 橘吉重が幼名彦次郎として関わった。

また、室町時代は戦乱の時代が続いたが、室町時代末期の嘉吉元（1441）年に室町幕府の管領であり、播磨の守護であった山名持豊やまなもちとよは守護代垣屋某を入部させたことが『建内記』に、本市の船上山ふなげやまに城郭を構えたと『続太平記 卷12』に記されている。

本市の中世城郭としては、魚住城、船上城があげられる。これらの城郭からは、堀跡や井戸跡などの遺構や輸入陶器、瓦などの遺物が見つまっている。



図1-19 中世 明石郡の様子

(4) 近世

①安土桃山時代

織田信長と羽柴秀吉(後の豊臣秀吉)が中央政權を握っていた安土桃山時代の本市では、秀吉に関わる史料がみられる。天正9(1581)年には秀吉が林神社に参詣したこと(『林神社伝記』)、秀吉が人丸社に新開田地30石を寄進したこと(『月照寺文書』)、秀吉が信長に歳暮として明石の干鯛1,000匹、くも蛸3,000匹を贈答したこと(『太閤記』)などの記載があり、このなかでも、明石のタイとタコが古くから貢物として重宝されていたことが推測される。

また、天正13(1585)年には秀吉は高山右近を高槻から明石に転封させたため、領民の多くが切支丹になったとの記載が『高山右近太夫長房伝・契利斯督記』にある。

右近は枝吉城(神戸市西区枝吉)に入り、本格的に船上城の築城に着手した。右近は約2年間、明石を治めたが、天正14(1586)年には神父ガスパル・コエリヨが秀吉に面会のため長崎から大坂に向かう途中に明石に立ち寄り、右近や小西行長、黒田孝高などと共に神父を出迎えたとの資料が残されている(『フロイスの日本史』)。しかし、天正15(1587)年に秀吉が『天主教』を禁止したことにより、右近は追放された。

参考:『日本西教史・混石滴写・アントニオ・ブレネスチーノの未完書簡—高山右近の研究と資料』

②江戸時代

江戸時代になり、元和3(1617)年に小笠原忠政が大坂夏の陣の戦功により船上城に入った。翌年、忠政は将軍から新城造営を命ぜられると、戦略上の要地である現在の地を選び、元和5(1619)年に明石城が築かれたとされる。また、同時に城下の町割が行われた。忠政が入城の際には船上城下の民も明石城下に移ったとされる(『古事談第6・7本』)。この町割には剣豪として有名であった宮本武蔵が関与したと伝えられている。明石城には旧河道など低地部を利用して外堀が設けられ、中堀に沿った小高い土地の上には上級武士の屋敷が多く建ち並んでいた。こう

した上級武士の屋敷跡からは肥前の有田でつくられた薄手の高級な焼き物などが比較的多く発掘されている。各屋敷の境には溝がめぐらされ、屋敷の出入り口には門が設けられた。建物には礎石をもつものと掘立柱の2種類がある。また、井戸は各屋敷地内で見つかっており、井戸枠には桶を積み重ねたものが多く認められる。現在も「山下町」や「鷹匠町」などの町名や通りの一部には城下町時代の面影が残っている。しかし、寛永8(1631)年に明石城が焼失し、以降、三の丸西部の内堀に囲まれた一郭になる居屋敷曲輪が藩主の居館となった。寛永10(1633)年に、松平康直が信州松本から封ぜられ、寛永16(1639)年には大久保季任が、慶安2(1649)年には松平忠国が明石に入封、延宝7(1679)年には本多政利が、天和2(1682)年には松平直明が入封して、以降、明治維新まで松平家が明石藩の藩主となった。



屋敷境の溝跡(東仲ノ町)

(明石市立文化博物館『01特別企画
発掘された明石の歴史展～まちに眠る
古代の姿～』平成13(2001)年)

江戸時代には幕府は各地で街道を整備したが、本市域では、大蔵谷と大久保、清水（長池）に宿場を設け、本陣、脇本陣、旅籠屋でにぎわった。また、西国街道など街道沿いには、今も街道道標が残されている。このほか、本市から西に向かう高砂道、太山寺に向かう太山寺道、明石川に沿って北上し、三木街道につながる鷹の道など、街道が発達した。



「左 大山寺道」 道標

一方、寛永 16（1629）年に鳥羽部落の開拓にはじまり、その後、万治 3（1660）年までの 31 年間に松陰新田、鳥羽新田など西北部の台地が開発された。新田開発には水が不可欠であるが、明暦 3（1657）年には灌漑用水に恵まれない林崎地方に明石川から用水を引いて鳥羽の野々池に貯水する工事が始まり、翌年の万治元（1658）年 4 月に堀割溝が完成した。その後、鳥羽新田堀割や大久保堀割が完成し、寛文 11（1671）年には太山寺川から水を引いて伊川谷堀割も建設された。



林崎堀割（堀割渠記碑）

海に目を向けると古くより、良好な漁場であった本市の村々では、漁場の利権を巡って、林村と東二見村の間で、天正の訴訟（1586 年頃）や寛永 18（1641）年、宝暦 11（1761）年の訴訟など度重なる争いがあった。

一方、江戸時代には、西灘の酒造業が盛んになり、天保 13（1842）年頃には領内に 61 軒の酒造家があって同業組合を組織し、酒蔵大行司が株仲間を統率していた。

また、播磨地方の産米は平安時代から播磨米と呼ばれ、灘の酒米に利用されるほか、他国のコメと比較して優秀品として富豪の飯米として賞美され、「天守米」と呼ばれた。明石城主であった小笠原忠政は産業の発達にも力を注ぎ、京都から陶工を招き戸田織部之助にその指導を受けさせて城内で陶器を焼かせた。幕末から明治、大正時代にかけては、大蔵谷を中心に、「明石焼」と総称される碗や皿、鍋などの日常雑器を焼く窯があり、なかでも、荒尾窯・北條窯・上ノ丸窯は発掘調査によって、その場所が確認された。

このうち、荒尾窯は大蔵八幡町にあり、連房式の登り窯で、碗・皿・鉢・壺・土鍋・土瓶などを焼いていた。また、北條窯は、樽屋町にあった窯で、日常雑器とともに、交趾焼とよばれる輸出用の壺や瓶なども作っていたことが確かめられている。

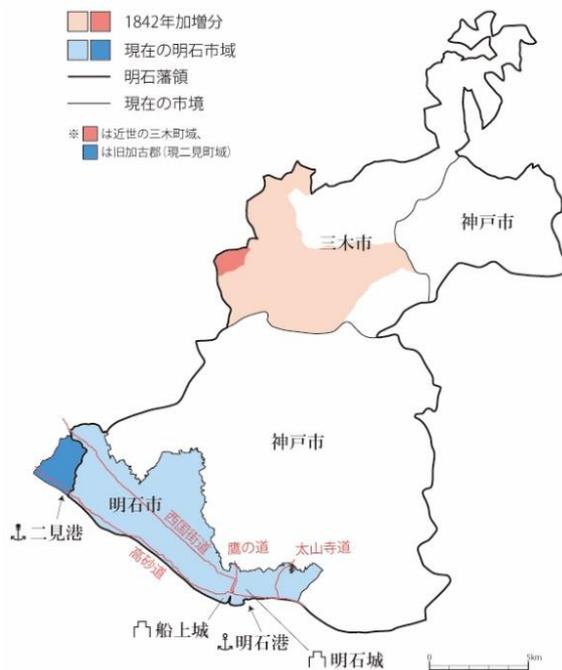


図 1-20 近世 明石市及び周辺の様子

(5) 近代

①明治時代

明治4(1871)年、11月2日に姫路県が成立、同月9日に播磨県と改称された。播磨県は郡域が大区とされ、明石郡は第一大区となり、8つの小区がおかれた。その後、明治11(1878)年に大区、小区が廃止され、郡区一町村という区画が設定された。明石郡では市街地に明石郡役所がおかれ、重要な役割を担った。さらに明治地方政治制のもと、明石町、林崎村、大久保村、魚住村、二見村が生まれた。この旧来の町村は大字や区と呼ばれ、地域運営の基礎を支える団体として現在まで重要な位置を担っている。

明石藩の中心であった明石城には、明治8(1875)年に公立伝習学校支校(のちの兵庫県明石師範学支校)が設けられた。さらに、明治14(1881)年頃に神戸区湊川神社の周辺に相生学校を建築することとなり、県は建築用材として明石城櫓の解体を始めて大きな騒動となった。その後、明石郡内の有志により、明石城址の貸下げが出願され、明治16(1883)年に公園開設の許可を得て、当初は民営とし、明治23(1890)年より郡立公園が誕生した。

しかし、明治31(1898)年、皇太子殿下(大正天皇)御用邸の候補地として挙げられたため、公園を廃して、御料地となった。また、本丸跡には、明治19(1886)年に明石神社が創建、明治29(1896)年には兵庫県立農学校(現 兵庫県立農業高等学校)が建設された。その後、大正7(1918)年には、宮内省から本丸付近を借地して県立明石公園が誕生した。

一方、明治6(1873)年、太政官布告によりキリシタン禁制が解除され、明治11(1878)年に明石組合基督教会が創立、その後、明石自由メソジスト教会、明石人丸教会などが順次創設された。

明治政府は欧米の制度や技術、文化を積極的に取り入れようとしたが、そのひとつが日本標準時の導入である。明治19(1886)年には東経135度の子午線上の時間を中央標準時として決定した。しかし明石町(当時)を子午線が通過しているにも関わらず、町民がよく知らなかったことから、明治43(1910)年に明石郡の教員団が明石町内相生町(旧)と明石郡平野村黒田県道筋に標準時子午線標識を建設した。その後、東経135度子午線測定の結果を受けて、昭和3(1928)年、新しい子午線標示柱が人丸山月照寺本堂前に建てられた。

明治44年(1911)年8月11日には「中崎公会堂」の柿落しで夏目漱石が講演するなど、文化的な交流もみられた。

近代は、交通網も飛躍的に発達した。山陽鉄道は明治21(1888)年から運転を開始し、兵庫と明石間が開通したが、明治35(1902)年に鉄道敷設法が公布され、さらに明治39(1906)年に鉄道国有法が公布されたことにより山陽鉄道は政府に買収され、山陽本線として国有化された。明治39(1906)年には、神戸市羽坂通3丁目と明石町ノ内大明石村間に電気鉄道敷設を計画し、兵庫電気軌道株式会社(現在の山陽電気鉄道本線のうち、山陽明石駅以東の区間を開業)が創立された。



子午線標識
(明治43(1910)年建立)
(明石市立天文科学館HP)

また、明石と淡路島間の連絡船は明治21(1888)年に明石と岩屋間を一日5往復していたが、明治27(1894)年には東浦、西浦に連絡し、明治時代末期には大阪、兵庫行や西播磨行の航路が開かれた。現在は、本市と淡路市岩屋を結ぶ淡路ジェノバラインが運航している。

さらに、古代より瓦生産が行われていた本市では、「明石瓦」と呼ばれる瓦生産が盛んになり、明石瓦事業協同組合が発足した昭和20年代の最盛期には八木界限を中心に製造業者が75社あった。しかし、昭和40(1965)年頃、全国的な公害問題の高まりや、他産地との価格競争もあって、昭和60(1985)年には組合加盟社は8社まで減り、現在はすべて廃業している。

漁業に関しては、明治8(1875)年には鮮魚仲買商「林兼商店」の中部幾次郎なかべいくじろうが日本発の石油発動機付き鮮魚運搬船を建造し、その後、これを改造した船は「明石型生船」と呼ばれ、瀬戸内海だけでなく、朝鮮半島近海までその活動範囲を広げた。

②大正時代・昭和20年まで

明治時代の発展の経緯を経て、大正8(1919)年に明石市制が施行され、兵庫県下で4番目の市が誕生した。その後、昭和17(1942)年に林崎村と合併した。

市制の施行と共に、市立の女学校や市立明石中学校の創設、上水道の敷設、県の水産試験場が建設された。さらに昭和9(1934)年には国立養糸試験場明石支場(現在の明石運転免許試験場)が開場するなど近代産業の礎が築かれた。

また、上ノ丸太寺地区の耕地整理、大蔵谷の土地区画整理などのほか、大正時代には船舶用発動機関の工場が創業、また昭和15(1940)年には、川崎航空機工業(現:川崎重工業株式会社)明石工場が立地した。しかし、第二次世界大戦下、昭和20(1945)年の第一次空襲から第六次の空襲を受け、甚大な戦災で全市街地の約6割を焼失し、なかでも商店街や工場、事業場を失った。

一方、近代以降、太平洋戦争の末期には永井荷風が大蔵谷の西林寺さいりんじで疎開するなど、文学に関わる文化も展開した。

広域幹線道路についてみると、昭和39(1964)年に名谷―大蔵谷間を結ぶ「神明道路」(のちの第二神明道路)が開通し、東西の物流が飛躍的に拡大した。



図1-21 近代 市制町村制施行時の明石郡町村(明治22(1889)年4月)の状況

(6) 現代

①戦後復興期

戦後の復興に向けて、本市では機械器具工業隆盛に向けた歩みが進められ、また、占領政策の一環としての農地改革が進められた。さらに、水産業についても「つくる漁業」、「栽培漁業」が推奨され、市内の七漁業組合でノリなどの養殖が始められ、昭和 35 (1960) 年から若干の収穫量を見るようになった。

昭和 26 (1951) 年には大久保町、魚住町、加古郡二見町との合併がなされ、市域が拡張し、新明石市が発足した。

戦災からの復興のために、戦災復旧上水道事業、戦災復興土地区画整理事業、墓地移転、街路事業、公園事業なども進められた。さらに、昭和 29 (1954) 年に明石・鳴門海峡にフェリーボートが開通した。

②高度経済成長期から現代まで

昭和 40 (1965) 年に神戸明石道路 (バイパス) が完成し、阪神地区から明石・姫路と山陰方面、淡路・四国方面への交通は所要時間が約 50 分短縮され、神明・明姫国道の交通量は著しく緩和された。

その後、第二神明道路が昭和 45 (1970) 年 3 月に完成し、昭和 55 (1980) 年には明姫幹線が全線開通して、物流などに関わる道路交通環境は整えられた。

一方、子午線の町、明石を象徴する市立天文科学館が昭和 35 (1960) 年に竣工し、昭和 36 (1961) 年には日本標準時制定 75 周年記念式典が開催され、平成 22 (2010) 年には展示室をリニューアル、平成 24 (2012) 年にはプラネタリウムの稼働時間が日本一となった。

交通機関についても、国鉄 (当時) の高架化などが進められ、昭和 33 (1958) 年には西明石～姫路間の電化が完成、昭和 36 (1961) 年には当時の国鉄魚住駅が開業した。さらに山陽新幹線西明石駅が昭和 47 (1972) 年に、国鉄朝霧駅が昭和 43 (1968) 年に開業、昭和 47 (1972) 年には山陽新幹線の新大阪～岡山間が開通するなど、公共交通の利便性も向上した。

文化財に関する調査では、昭和 33 (1958) 年には林^{はやし}下^{しも}溝^{みぞ}海岸^{かいがん}における学術発掘調査でアカシゾウの化石が発掘され、続いて、昭和 41 (1966) 年には大阪市立自然史博物館を中心とする調査団が中八木海岸の屏風ヶ浦粘土層からアカシゾウの一頭分の遺体を発掘した。

また、昭和 6 (1931) 年に西八木海岸で発見、昭和 23 (1948) 年に数十年前の人類の骨とされた「明石原人」について現地調査が行われた。さらに、昭和 60 (1985) 年には再発掘調査が実施され、「アカシ」起源の解明に向けた取り組みが行われている。

また、昭和 32 (1957) 年には市立水族館が開館、昭和 49 (1974) 年には明石公園内に県立図書館、市立図書館、市立公民館が開館するなど、文化施設も充実してきた。

こうして発展を続けてきた明石市であるが、災害も多発した。昭和 24 (1949) 年には、明石駅前の自由市場の大火で 426 戸が全焼するほか、平成 7 (1995) 年の兵庫県南部地震によって、明石城跡の櫓や石垣をはじめ、多くの被害を受けた。

このうち、明石城跡は、それまで現存していた石垣立面積約 20,000 m²のうち 942 m²が崩壊した。しかし、明石城跡は阪神・淡路大震災以降、修復に 10 年を要するとされた石垣修復を着工からわずか 1 年 8 ヶ月で竣工し、「平成の天下普請」と称された。

また、国指定重要建造物である 2 つの櫓についても壁の塗り直しや屋根の葺き替えが全面にわたって実施された。両櫓の修復にあたっては曳屋工法ひきやこうぼうが採用され、現在の姿に整備された。



震災で崩れた二ノ丸の北辺石垣
(兵庫県立歴史博物館 HP)



震災で崩れた薬研堀石垣
(兵庫県立歴史博物館 HP)

また、平成 10 (1998) 年には明石海峡大橋が開通して淡路島との往来の利便性が拡大すると共に、平成 15 (2003) 年には防災センターが開館して災害への防備に努めるなど、着実な市政が進められ、平成 30 (2018) 年に明石市は中核市に移行した。

令和元 (2019) 年は明石市制施行 100 周年の節目の年にあたり、9 月 7 日には「明石市史シンポジウム—歴史から探る明石の魅力」、11 月から 12 月にかけて「発掘された明石の至宝」をテーマとして記念企画展、講演会、シンポジウムなどを開催した。

さらに、明石城築城 400 周年記念事業の一環として、令和元年 9 月から 10 月にかけて、明石市立文化博物館で「城と明石の 400 年—明石藩の世界 VII—」と命名した特別企画展を開催するなど、歴史文化遺産を活用した取り組みを継続して進めている。



図 1-22 現代 現明石市発足当時の市域周辺 (昭和 26 (1951) 年 1 月) の様子